

# 肺門部リンパ節転移陽性 (N1) 非小細胞肺癌における病理学的予後因子の探索

あら き くに お 夫<sup>1)2)</sup>      め つぎ ひろ ゆき<sup>1)</sup>  
荒 木 邦 夫      目 次 裕 之

キーワード：肺癌，肺門部リンパ節転移，病理学的予後因子

## 要 旨

【背景と目的】肺門部リンパ節転移陽性 (N1) 非小細胞肺癌の術後再発に関わる病理因子について検討した。【対象と方法】2000–20年に当院で肺葉切除+系統的リンパ節郭清を実施した N1 非小細胞肺癌手術 44 例の術後再発 (率) を算出し、予後不良病理因子と推定される低分化組織形態，静脈侵襲，胸膜浸潤，Spread Through Alveolar Spaces (STAS) と再発との関連について比較・検討した。【結果】術後再発 (率) は 25 例 (56.8%) にみた。上記 4 つの病理因子と再発との関連を調べたところ，いずれも単独では再発因子とならず。一方，4 因子のうち 2 因子が重複して陽性となった症例の再発率は 76.0% となり，それ以外の症例の再発率 31.6% と比較して有意に予後不良であった。【まとめ】N1 肺癌に対する病理因子解析で，複合的な予後不良病理要素をみた場合は，再発に十分な注意が必要と考えられる。

## はじめに

肺門部リンパ節転移陽性 (N1) 非小細胞肺癌は系統的リンパ節郭清を伴う肺葉切除により根治が期待される一方，標準手術を行っても術後再発を生じる頻度は決して少なくはない。この理由として，病理学的悪性度が手術治療効果を凌駕する状況が潜在するためではないかと思わせる症例を時々経験する。そこで当院における N1 肺癌の術

後再発症例の実態を明らかにした上で，再発に関わる病理因子について検討を加えた。

## 対象と解析事項

2000–20年の期間に当院で手術治療 (肺葉切除+肺門縦隔リンパ節郭清) を実施し，病理学的に N1 と診断した非小細胞肺癌 44 例を対象とした。

術後再発 (率)，5 年および 10 年後生存率を算出した。その上で，年齢，性別，組織型 (腺癌/非腺癌)，手術アプローチ (開胸/胸腔鏡)，手術時間，術中出血量，リンパ節郭清範囲 (ND2a-1/ND2a-2)，術後補助化学療法実施の有無に関して，再発との関連を比較・解析した。

Kunio ARAKI et al

1) 国立病院機構松江医療センター呼吸器外科

2) 松江市立病院呼吸器外科 (R5.4.1より)

連絡先：〒690-8509 松江市乃白町32-1

松江市立病院呼吸器外科